

アメリカ社会考現学

野口昌宏

(法学部教授)

1. 変貌するアメリカ

1993年5月末から、シアトルのワシントン大学に再び留学した。ワシントン大学は3年前に資料収集で訪れて以来だが、今回は短期留学のための4カ月間の滞在であった。

5月22日の夕方、成田をオン・タイムで発った飛行機(AA26便)は、9時間後、同じ日の午前10時にシアトル・タコマ空港に到着した。空港で入国手続をすませ、荷物を受け取り、そして日本で手配しておいたレンタカーをピックアップして、旅行トランクとパソコンを積み込み、ようやく空港の駐車場を出たのは、すでに12時を過ぎていた。高速道路をシアトルに向かってアクセルを踏むと、シアトルの風が染みてくるのが分かる。

ヨーロッパのパリと同緯度の北の街シアトルは、街中に木々の緑と大小の湖や入り江が多く存在する美しい街だ。シアトルは、市内で全ての看板とネオンサインを禁止しているために、街全体がエレガントで落ち着いた雰囲気漂わせていて、今アメリカ人が一番行ってみたい都市にあげられている。

だが、この数年間にシアトルも、南からの人口流入が激しく、3年ぶりに訪れたこの街も、市内にあるユニオン湖の回りが開発され、大きなヨットハーバーには大型クルーザーがたくさん係留され、フリーウェイは以前にも増して車があふれていた。かつてはうつむき加減に歩く学生だけがいたインテリジェントなワシントン大学地区にも、今は学生ではない若者が増えてたむろしている。この街の都市環境も、アメリカの他の大都市と同じように、徐々に悪化の方向をたどってきているのが分かる。

最近のこの町の変わりように、シアトルに古くから住んでいる人々は、きっと嘆いていることだろうと思う。

留学中の住まいに、市の北部地区の静かな住宅街にアパートを見つけた。4カ月間のための短期で貸してくれるアパートがほとんどなく、ようやく見つけた家具付きのアパートは、レントが少々高かったが、こちらでベッドや机などの家具、寝具や食器類を購入することと比較すれば仕方のないことだ。

アメリカは個人主義の国だから、他人がとやかく世話をやいてくれることはない。すべて自分でやらなければならないので大変だが、たまたまアパートのマネージャーが親切な

人で、ファクシミリ・マシンと大きな机を手配してくれたので助かった。

今回の留学は、ワシントン大学ロースクールで、かつてご指導をいただいた、Asian Law ProgramのDirector、Dann F. Henderson教授は退職され、また現在、ヘンダーソン教授にかわってDirectorをされておられるJohn O. Haley教授はフルブライトで日本の東北大学に留学中であったために、かわって、Graduate Studies CommitteeのLinda S. Hume 教授にお世話をいただき、おかげで法学部図書館のスタッフとしても研究の便宜を計っていただくことができた。

2. 会話がサービスの国

シアトルに来て1週間たった頃、初めて昼食に麺類を食べようと思って、韓国人がやっている中華料理の店に行き、牛肉と野菜入りヌードルを注文した。その時「chopstick」という単語を思い出せなくて、2回言い直してしまった。あとで韓国人のウェイトレスが回ってきて、小皿にいれた激辛のキムチをサービスしてくれた。そして、私に「中国人？」と聞いた。私は、

「日本人で、先週日本から来たばかり」と答えると、彼女は、

「私には五年間こちらに滞在している日本人の友人がいるよ」と言った。

アメリカでは、ときどき、日本から来たと言うと、店員やタクシーの運転手に、「私にも日本人の友人がいるよ」と言われることがある。時には、ご丁寧にも、「その友人は『鈴木』と言う名前だよ」などと言う人もいる。

商売上のお世辞か、それとも単なる会話のための話題作りか、よく分からない。だが、それをきっかけに心が通じて、互いの会話が弾むのがアメリカだ。

帰りがけにそのウェイトレスが私に、この店に「高菜うどん」と「マチコうどん？」（言葉をキャッチできなかった）があるよと教えてくれた。

ところが、数日後、銀行でアパートのレントの支払いのために、マネーオーダーを作ってもらった時、窓口で私は、

「日本からきたばかりで自分用の小切手帳を持っていないので…」などと話していると、窓口の若い女性が、にこやかに微笑んで、

「そう、シアトルにどのくらい滞在するの？」「私のボーイフレンドは、いま神戸にいるよ」と話しかけてきた。私は、やはり、と思いながら、

「そう、神戸はすてきな街ですね、あなたは神戸に行ったことがありますか？」などと応じて、話が弾む。そして最後に彼女は

「シアトルの滞在をたのしんで下さい」と言っていた。

アメリカでは、とにかくしゃべらない者には無能のレッテルが貼られる。とくに初対面

の人とは、なにげない話から会話を始める。しかし、Talk too muchは嫌われる。ピンポン玉のように会話が行ったり来たりするのがアメリカ人の会話だ。

そのために何でも話題を見つけてしゃべり続けることが生活の基本なのだ。パーティなどで話題が見つからないときなどは、相手が変わるとまた同じ話題でとにかくその場をつなぐ、というような苦勞をする。商売も客と会話を交わすことがサービスだと考えているのである。

アメリカのように人種が解け合わない「人種のモザイク」の国では、人種が異なれば宗教が異なり、それぞれ価値観も異なるので「微笑みと会話」が最大のコミュニケーションの手段である。そしてそれは相手に対して、敵意のないことの証明でもあるのだ。

日本式の「男は黙って勝負する」は、通用しないし誤解を生ずることになる。

3. アメリカは危険な国か

シアトルに滞在して間もない5月23日、ルイジアナ州バトンルージュでの日本人留学生・服部君射殺事件に関する陪審裁判の無罪評決が出て、アメリカの新聞やテレビでも大きく報道された。この留学生射殺事件は、もとはアメリカではたいしてニュースにならない、どこにでもあるただの殺人事件だったが、事件があったバトンルージュには、日本からの報道陣が多数やってきて、ロドニー・ピアーズ被告を取り巻くために、逆にアメリカのメディアに関心をもたれたという結果をもたらした。

裁判は、ルイジアナ州東バトンルージュ・カウンティの地方裁判所で、5月17日、陪審員の選出から始まった。12人の陪審員が決定するまで3日間かかったこの選出手続は、陪審員候補者48人から、検察官、弁護士の双方が、自分に不利だと思われる候補者を、それぞれ12人まで忌避できる権利を有しているが、2日目に弁護士が12人分の忌避権を使い果たしたとき、検察官はまだ3人分の忌避権を残していたという。陪審裁判は、陪審員選出から双方の駆け引きが始まるのだ。

一方、ガン・コントロールについては、アメリカでも二つに意見が分かれる。建前としては、誰もがガン・コントロールを願っているのは当然である。しかし、現実のアメリカ社会では、自分のインセキュリティーを誰が救ってくれるかといった問題がある。教育も、安全も、健康も、自分の力で自分と自分の家族を守るしかない、といった意識がある。特に保守的な南部の州はこの意識が強いという。

この思想は、かつてアメリカ人の祖先が、アメリカに着いたとき、着るもの以外の物をもって来た人はごくわずかで、彼らのほとんどは援助もなく、自らの力で成功への道を登らなければならなかった。それ以来、アメリカは自由で自分の努力でアメリカン・ドリームがかなえられる反面、自己管理を要求される厳しい個人主義社会なのだ。

ところで、この事件については、日本側メディアも、ニューヨーク・タイムズを始めとするアメリカ側メディアも、アメリカにおける銃の取扱に批判的であった。しかし、この事件に関して、ニューヨーク・タイムズの社説は、一応、建前論を言っているに過ぎないように思えた。と言うのは、他方ではニューヨーク・タイムズやニュース・ウィークの事件報道は、事実関係において具体的詳細で、日本のメディアとは微妙な違いを見せていたからだ。犯罪の発生件数と銃はイタチごっこの関係にあり、建前でガン・コントロールだけを言っても、アメリカでは無意味さを感じる。だからといって、誰もが「危険」を容認しているわけではない。

よくアメリカは危険な国だと言われるが、シアトルは、基本的には落ち着いていて危険性の少ない都市であり、夜の一人歩きも概ね安全だ。ここ数年、アメリカには、西アジア、中南米、東南アジアからの移民が増えており、シアトルも同様に、以前は見かけることがなかった西アジアやベトナムからの人々がかなりいる。ベトナム戦争終結以後、旧南ベトナムから逃れたベトナム人を頼って来る人がここ数年間に増えて、シアトルにも以前にはなかったベトナム・フーズの店が何軒も出来ていた。アメリカは彼らを受け入れているし、彼等の多くは真面目に生活している。しかし、一方では、不法入国者によって、治安はますます悪くなる。見方によってはアメリカで犯罪を犯す者の何割かは、アメリカ人ではないとも言える。

一般的にアメリカの都市は、人の住む場所が階層的に分かれている。そのために危険な地区に行かなければ、事件に巻き込まれることは少ない。多くの都市では、一本の通りを境にして極端に治安が悪くなる。そのために観光客や留学生が、慣れない街をうろうろ歩いていて、気付かないうちに通りを渡って、危険な地区に入って事件に遭うケースが多い。

昔、アメリカの不動産開発業者は、不動産を分譲販売するとき、契約書に「この土地の買主は以後この土地をある特定の人種には売却しないこと」という条項を入れて地区の環境悪化を防いだ。

今はその様な条項を入れることは、憲法違反となる判例が出ていて（たとえば、ライトマン対マルキー387U.S.369（1967））、この様な契約は当然出来ない。そこで業者は、分譲面積を広くして低所得層の人が買えないようにして、事実上特定の人種を排除して地区の環境を維持しようとしている。判例などを読むと、たとえば、かつての1930年代には、篤志家が土地を公園用地として市に信託で寄附するときなども、公園を黒人に使用させないという人種差別公益信託が認められて、公園から黒人が排除されていた（エバンス対アブニー396U.S.435（1970））。

したがって、今でもアメリカでは、どこに住んでいるかでその人の社会的地位が分かる

といわれる。パーティでも、「どこに住んでいるの？」と聞かれるし、初対面で、この人はどの様な人かを知りたいければ、手取り早くどこに住んでいるかを聞けば、だいたいの判断が付くと言われる。実際に、私もアメリカで、どこに住んでいるのと聞かれることがあったが、それはそのような意味があるわけだ。もっとも私は定住者ではなかったが…。

4. ボランティア社会

アメリカ滞在中の6月に、カリフォルニア大学バークレー校を訪れるためにサンフランシスコへ行った。丁度この時期に、ノースウェスト航空が、国内航空料金を半額以下にダンピングした。航空会社間で料金をダンピングしないとされた内輪の望みに反したダンピングであり、他の航空会社もやむを得ずこれに追従して値下げした。利用者にとっては有難い料金で、おかげで私はユナイテッド航空で、サンフランシスコ往復が、たったの100ドル+消費税の計113ドル（約1万2000円）という驚くべき格安料金で行って来た。シアトルの旅行社で航空券を手配してもらうとき、カウンターの女性がこの料金を見て、「私もサンフランシスコに行きた〜い」と叫んでいたくらいだ。

しかし、アメリカでは、ノースウェスト航空はダンピングを繰り返すので、そろそろ倒産するだろう、というもっばらの噂だった。太平洋路線も機体整備や燃料に関するトラブルが多いので、私は以前からノースウェスト航空にだけは乗らないことに決めている。サービスが悪いなどということ以前の問題だからだ。

サンフランシスコからシアトルに戻るとき、サンフランシスコ空港でのこと。広い空港の中でユナイテッド航空のチェックイン・カウンターの場所を捜していたとき、そばのインフォメーション・カウンターの中にいた黒人青年に尋ねた。青年が親切にユナイテッド・エアーのドメスティック・カウンターの場所を教えてくれた。そして、青年が私に、「何国人か？」と聞いた。私は、「日本人だよ」と答えると、「そうか、ちょっと待って」と言っ、何やらファイルした説明書を取り出して、日本語のページのところを開き、「ここを読んでみて」と私に言った。

そこには、アメリカの恵まれない子供たちのための医療費の募金のお願いが書いてあった。「あなたの5ドルで子供が1人、10ドルで2人、20ドルで幾人かが医療にかかる」という説明であった。そして、青年がカウンターの下から台所用品の金属製のボールを差し出した。しかも、かなり使い古した感じのボールだった。募金といっても、日本のように格式張った募金箱でないところが、いかにもざっくりばらんでアメリカ的だ。私は5ドル札をボールにいれながら、

「ユナイテッドの場所を聞いたために、5ドルも浪費してしまったよ！」と笑いながら冗談を言うと、黒人青年も負けずに、

「あなたは日本のジェントルマンだ、良い人間だ」と人をおだてて、そして、

「よいご旅行を！」と陽気に笑った。

アメリカ人は、よくボランティア活動に参加したり、衣類やお金を寄付する。それは、宗教（キリスト教）が社会に貢献することを徹底して教えているからだ。

旅のふれ合いなんてどんな話題からでも始まる。アメリカ人には、日本人も韓国人も中国人も区別がつかないが、私のような東洋人にも、陽気に接して来るサンフランシスコのアメリカ人は、なんと気が良いのかと思った。北の多少ナーバスなシアトルの人と違って、同じアメリカでも南は陽気だ。

5. アメリカ人の国家意識

シアトル滞在中に、たまたま知人に誘われて、小学校の音楽発表会（日本の学芸会のようなもの）を見に行く機会があった。地区にある500～600人は入る、大きな教会の礼拝堂を借りて行われた発表会は、夕方7時から始まった。夕食後、両親や祖父母ら家族がみんな集まってきて、礼拝堂は満員だった。その日の音楽会のテーマが、「アメリカ」ということで、プログラムには賛美歌とアメリカを詠った歌が並んでいた。ところが会が終わりに近づいたとき、司会者の子供が、

「軍隊に行ったことがある人は、前に出てきて下さい」と言った。

客席の父母達の中から、20～30人の男の人がぞろぞろ前に出てきて、みんなの前に並んだ。すると客席の人たちは、めいめいに立ち上がってその人達に拍手を送り始めた。それは、プログラムの最後にある“God Bless America（アメリカに神の加護をあらんことを）”を歌って会を終了するためであった。

アメリカは個人主義の国だが、公私の区別がはっきりしている。このようにアメリカの国家と国民のために、軍隊に行った人をたたえて感謝する姿を見て、アメリカ人の国家意識が強いことが分かる。国家があって国民がいれば、外国ではそれは当然の光景なのかもしれない。その当然の光景は、戦後、国家と国民の関係について正面から議論することを選んできた日本では、とても考えられないことだ。戦後育ちの私にとっても、その現実を見たとき、複雑な感情がこみ上げてきて、頬がひきつる思いがした。

この光景は、まさにアメリカン・ナショナリズムの象徴でもあり、アメリカ人の持つ「ドゥリーム・オブ・国家」そのものでもある。見方によっては、アメリカは、このナショナリズムを越えない限り、真の世界のリーダーとしての地位を得ることは難しいのかもしれない。

それにも増して、前に出てきた人たちのほとんどが中年以上の年輩者で、でっぶりとお腹が出てしまって、ベトナム戦争も遠くなったという感じだった。しかし、そのとき前に並んだ人達の誰もが、いつものアメリカ人のような微笑みを決して見せることはなく、押し黙っていた。アメリカ社会には、未だにベトナム戦争の後遺症が残っているのだ。

(Feb.10,1994)